

自己判断力・自己決定力をつけよう

～めあてとふり返りをくり返す中で～

特別活動 第6学年

能美市立湯野小学校・教諭

1 事例の概要

本校は各学年2クラスの中規模校である。6年生児童(64名)は、休み時間に1年教室に遊びに行ったり、体育館や運動場で異学年の児童と遊んだりする姿が多く見られる。ただ最上級生として、指導をする役割としての関わりで下級生と遊んでいる児童は少ないように思われる。話し合い活動では、大勢の前でも自分の経験や気持ちを積極的に話そうとする児童もいるが、遠慮して話せない児童も少なくない。

教師側として、『自己判断力・自己決定力をつけさせたい』、『自己有用感・自己存在感を持たせたい』という願いがある。これらの願いを実現するために、6年児童一人ひとりに何らかの形で中心的な役割を経験させ、『めあてを立てる→計画を立て実践する→ふり返りをして次の活動に生かそうとする』活動をくり返していけば、少しずつでも力はついてくるのではないかと考えた。また、これらの経験を通して自分の気持ちを積極的に話すことができるようになっていくと思われる。

本事例は、このような願いの中で、児童が『めあてを立てる→計画を立て実践する→ふり返りをして次の活動に生かそうとする』実践事例の一部である。

A-1 児童会・実行委員会活動組織

A-2 八色顔合わせ会

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・児童会として、縦割り八色チーム活動を活性化する。
- ・湯野小学校の最上級生として、指導をする気持ちで下級生と関わり合う。

(2) 指導上の工夫点(視点)

- ① 『今、自分は何のためにこの活動をするのか』という目的意識(めあて)を持たせる。
 - ・明確なめあてをもたせるために、教師が最初に意図を盛り込んだめあてをたたき台として提示し、それをもとに取り組むめあてを考えさせる。
- ② めあてにそった活動計画をたて、それを実践させる。
 - ・活動計画は、立てためあてに合っているかを常に確認させながら計画を立てさせる。
 - ・見通しが持てるよう、大まかなタイムスケジュールと段取りをプリントにし、配付する。
 - ・全員で協力する活動では、必ず司会進行も行い、その打ち合わせもする。
- ③ めあてにそったふり返りをし、次に生かそうとする場の設定をする。
 - ・全員で協力する活動後にふり返りをし、次のみんなを動かす活動に生かすようにさせる。
 - ・活動終了後、実行委員の児童司会で、ふり返りの会をもち、思ったことなどを自由に全員に言わせ、交流する。教師は実態に応じ、深く聞いたり、児童の意見をみんなに広めたりする。
 - ・家庭や学校でも再度ふり返らせる機会を持ち、その時言えなかったことや新たに気づいたことを書かせ、交流する。教師は課題となったものを取り上げ、次に生かしていくよう促す。

B-1 教師が最初に出したたたき台

B-2 指導上の工夫点①

B-3 指導上の工夫点②

3 指導の実際

学習活動・留意点等	●支援・★評価
1. 八色顔合わせ会をふり返る <ul style="list-style-type: none"> ・しっかりと協力してできた。 ・全員とは仲良くできなかった。 ・協力してくれない学年もあった。 ・下級生を思いやって活動できなかった。 2. 課題を確認する <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 八色対抗の運動会児童種目を何にしたらいいか考えよう </div> 3. 話し合いをする <ul style="list-style-type: none"> ○八色チームごとで話し合いをする。 ○話し合った内容を紙に書き表す。 4. 話し合ったことを八色チームごとに紹介する	★諸問題を出し合い、その解決にあたる。 ★自分の意見や気持ちを話すことができる。 ●自由に感想等を言うようにする。 ●6年生のめあて「下級生の名前を全員覚え、仲良くなろう」もふり返れるようにする。 ★課題に関心をもち、意欲的に話し合いに参加しようとしている。 ●リーダー司会のもと、チーム内で話し合いをしやすくなるように配慮する。

C-1 指導案

C-2 実行までの手立て

C-3 ふり返りや話し合いを生かして

4 成果と課題

(1) 成果

児童がめあてを立てる際、たたき台として教師の意図を盛り込んだめあてを提示し、それをもとに児童がめあてを立てることで、自主的な活動の中にも教師の意図した活動を仕掛けることができた。立てためあてを常に意識して活動させ、ふり返らせて次に生かす場を設定していくことで、児童が自ら考え、実践に移すことができた。

6年生全員での話し合いは、企画運営委員会や八色リーダー会で決定したことを、そのメンバーの児童たちが決定事項としてみんなにおろしていく形をとった。メンバーの児童たちは自分たちで話し合ったことを指示するので、自分たちで創り上げた活動のように取り組ませることができた。この形をとったのは、時間の制約上の理由からではあったが、限られた時間の中で自分たちが創り上げた活動として取り組ませる有効な一手段であった。

実行委員等では、中心的な役を、全員1回以上経験させることで、一人ひとりが「ぼく（私）ががんばったからできた。」といった思いを持つことができ、活動中や昼休みなど課外時間に自主的に活動する姿も見られた。実行委員などを経験すると、授業中や集会等での発表などの声比以前より大きくなるなど、行動に自信が見られるようになった。

(2) 課題

児童一人ひとりが、各種実行委員などの経験を通して得るものは、各種実行委員会によって仕事内容もめあてもちがうため、個人差がある。また、これまでこのような役をどれだけ経験してきたかにも影響されると思われる。

そのため、学校全体として、これらの活動経験を中学年（3・4年生）あたりから、毎年一人1回以上は経験させていく必要がある。中学年では『経験を積みなるべく全員が取り組む』、高学年では『自分たちで企画・運営できるようにする』『企画力をつける』という意識で取り組んでいくことが望ましいと考える。

今後、児童集会に全校児童が臨む際にも、「『今、自分は何のためにこの活動をするのか』という目的意識（めあて）をもたせ、めあてにそったふり返りをする」という活動を、企画運営委員会主体で繰り返し、全校児童にもめあてとふり返りを意識した活動を浸透させていきたい。